

鎮守府最速伝説

利摩 夕伊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元走り屋だった、提督

艦娘に勧められ提督業をしばらく休むことに

しばらくは艦娘と会えないであろうな、と思っていた提督だったが…

目次

第1話	提督休みに入る	1
第2話	提督伝える	4

第1話 提督休みに入る

俺の名前は熊谷 白吸(くまや しらすい)、とある鎮守府で艦娘の提督をしている。

今年で提督業も1年、そろそろ、海から離れた事したいなあ…そんなことを思っていた。

突然、執務室のドアが叩かれる

「提督、いらつしやいますか?」

「ああ、いるぞ、入ってくれ」

「失礼しますね」そう言って入ってきたのは、ピンクの髪が特徴の明石だ。

明石は工廠で艦娘の艤装の修復、そして、装備の開発などをしてい

る。

「今日はどうした?また、新しい装備を売り込みにきたのか?」

「今日はそんなんじゃないですよ」

明石は1枚の写真をポッケから出した。

そこには、1台の車が載っていた。

「…これ、S133のシルビアか?」

「お、提督すごいですね!見るだけでわかるなんて」

「まあ、もともと自分の車いじって、よく走らせに行っただけだからな」
もともと俺は走り屋だった。

ある時、親に真面目に仕事をしなさいと言われ、楽そうだから艦娘の提督になったのだ。

「それで?この車がどうした?」

「あ、そうなんですよ!この車、上の許可で買ったんですよ!」

…

え、どういうことだ、そんな書類あったか?なにかの、ミスでサインしちゃった?

俺は戸惑った。

普段、艦娘から上になにか申請を出す時、俺が必ず目を通して「確認済み」のサインしているのだ。

しかし、車を買うという書類は見た覚えもない、そして、サインだつてした覚えもない。

俺は明石に聞いた。

「明石…俺にその書類は出したか？」

「え？なんで私が出さなくちゃならないんですか？」

「…そっか、そうだったな」

明石、そして、大淀は上の方から来たので俺を通さなくても上に申請できるのだ。

「つていうか、この車この鎮守府に必要か？」

「いえ、特には」

「じゃあなんで買ったんだ!？」

俺は半分切れていた、車が鎮守府に来たのはいい、しかし、鎮守府の予算を使ったことがどうしても許せない。

明石は笑顔で答えた。

「提督のためですよ」

「はあ？俺のため？」

なぜ明石が、俺のためだと言っているんだろう…

「ココ最近、書類仕事頑張ったじゃないですか。そして、もう書類はななんですよ」

「あ、そうなんだあ…」

だからって、なぜ車になる!？」

いや、言えない…俺のために買ってくれたんだ。

とりあえずそんな言葉を飲み込んだ。

「つまり、書類仕事はもうないと？」

「はい…なので、たまには提督のしたいことをしてほしいんです!」

うーん…明石にはよく走り屋時代の話を熱く語ってたから、もしかしたらこうなったのかもな。

たしかに、明石本人には、俺は車から離れたなんて言ってない…

あ、これもしや伝えてない俺のせい？

まずい断れない…こうなったのは俺のせいだし、しかも、明石の笑顔が…これ、断ったら…艦娘からもう二度と提督と言われな

くなるのでは…

ああわかった、決めたよ。

もう1回、走り屋ライフを送るよ…

ん？走るのはいいんだが…

どこで、走らせればいいんだ？

第2話 提督伝える

「明石：…こいつをどこで走らせればいいんだ？」

俺は明石に聞いた。

一年前は「じゃあ、湾岸とかで走らせに行ってくる」とかなんて言えたが、

半年前から警察による取り締まり強化により、公道で車を走らせる（ここでは暴走させる）ことなんてできなくなったのだ。

サーキットに行けばいいって？

それは無理だ。

サーキットで走らせるには金がかかる、それもかなりの大金だ。

うちの鎮守府は安月給なのだ…

最低限の生活を送るのでさえいっぱいっばいなのだ。

「言うと思いましたよ」

明石は、答えた。

「サーキットで走らせに行ったら…とも思ってたんですが安月給の提督には厳しいですもんね」

「安月給いうなよ…」

こいつは、俺の心でも読んでいるのか？と一瞬思ったが、明石だったらそんなこともあるだろうと思いついた。

「提督、たしかに普通の人たちは公道で走らせることなんてできなくなりましたね」

明石は答えた。

そんな否定的なこと言われたらこの車の意味はないだろうと俺は思った。

「しかし！私は上に鎮守府関係の人は公道で走らせてもいいのでは、と提案したんですよ！しかも、その提案は通りましたよ！」

「は!？」

明石の力ってすげー、と思った。

「ただ、条件があるんですよ」

「条件？」

「走るついでにルーレット族たちを倒してほしい、とのことなんです」
え？まだルーレット族とかいるの？こんな厳しい世の中なのに？
「倒すって言っても暴力とかじゃなくて、車同士のバトルで倒してほしいとのことなんです」

最高じゃん、俺は昂る感情を抑えきれず少し笑顔になっってしまう。
「提督、嬉しいんですね」

明石は笑顔だった。

「もちろん、公道で走らせれる上にバトルもできるとか最高だろー！」
「よかった、さあ！走りたい気持ちがあるうちに、まず車を見ましよう！車は工廠にありますからね」

そう言っつて明石は執務室を出て行った。

さてと、艦娘たちに休暇をとることを伝えなければ。

面倒だし講堂に全員を集めて伝えよう。

あ、俺だけが休暇をとることはよくないな。

艦娘みんなに休暇を与えよう。

俺はとりあえず鎮守府全体に、講堂に全員集合とアナウンスした。

講堂にみんなが集まった。

俺はみんなの前にある台の上に立った。

そしてマイクを持つ。

「今日、みんなに集まってもらったのはみんなに伝えたいことがあるからだ」

艦娘たちは何だろう？と思っっているのか不思議に思うような表情をしている。

「俺はしばらくの間、休暇を取ることにした」

艦娘みんなは少し驚いた様子を見せていた。

実は、いままで休暇などを取ったことなどなかったのだ。

まあ、提督業は正直楽しいから。

休暇はなくてもいいんだけどな。

「司令官、私たちは司令官がいない間どうすればいいんだい？」

そういったのは俺の嫁艦の В е р н ы й (ヴェールヌイ) だった。

「それについてはいまから話すよ」

俺は答えた。

「俺だけが休むのはみんなに悪いから、みんなにも休暇を与えることにした」

俺はみんな喜ぶだろうなと思っていた。

しかし、艦娘みんなはあまり喜ばしいなさそうな感じであった。

「どうした？ 休暇だぞ！ 嬉しいことだろう？」

「テイトク！ たしかに休暇は喜ばしいことなのデース…」

そう答えたのは金剛だった。

「そうだろ？ なのに、なんで喜ばない？」

「それは… テイトクが休暇を取ってことが…」

ん？ なにか悪いことでもあるのか？

俺が休暇取っちゃだめなのか？

「テイトクが… この仕事が飽きちゃったのかと… 思ってるんデース…」

俺は少しびつくりした。

俺って周りからこの仕事に熱心に取り組んでると思われてたんだ。

「大丈夫、こんな楽しい仕事は他にないんだ。飽きる方が難しいよ」

艦娘全員がほっとした。

「まあ、伝えたいことはそれだけだ。解散！」

みんな講堂から出ていく。

みんな休暇に何をしようか自分の姉妹館艦などと話している。

俺は工廠に行かないと、と思いきステージから降り講堂から出ようとした。

「司令官、待って」

Верныйに後ろから呼び止められた。

俺は振り向く。

「Верныйどうした？ 自室に帰って準備でもしたらどうだ？」

俺は言った。

「司令官、ひとつわがままを言っていていいかい？」

「別にいいが？」

俺は何を言うんだろうと思っていた。

「休暇の間も一緒にいたいんだ」

В е р н ы йは頬を赤らめながら言った。

嬉しかった、自分の愛する人と休暇を過ごすなんて考えてなかった。

いままで彼女とかいなかったからそんな考えがなかったのだ。

「別にいいが?」

「本当に? いいのかい!」

В е р н ы йは嬉しそうだった。

「ありがとう司令官! 休暇の準備を急いでしてくるよ!」

あんなにはしゃぐВ е р н ы йは初めてみたなあ。

俺は可愛いなと思った。

さて、艦娘みんなに休暇も伝えだし、工場に行くか。

俺は講堂から出て工場へ歩いた。